The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『夜窓鬼談』から見る石川鴻齋の鬼神観とその展開
Author(s)	聶, 晶
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 67-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57332
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『夜窓鬼談』から見る石川鴻齋の鬼神観とその展開

聶　晶

1　はじめに

石川鴻斎は，日本幕末・明治期の詩文家・[1]漢学者・画家である。天保四年（1833）に生まれ，本名を英，字は君華，号に嵩雲・芝山・石英などがある。少年期から儒者の西岡翠園[2]，大田晴軒[3]らに師事し，専門の漢学・詩文のほか和歌・俳句・茶道・南画にも通じていた。著書として，『鼇頭音釈康熙字典校訂』，『画法詳論』，『詩法詳論』，『日本外史纂論』など多数。

明治二十二年（1889）と明治二十七年（1894）に，鴻斎が書いた上巻と下巻全 88 編の『夜窓鬼談』という漢文怪異小説集が出版された。作品では日本の昔話・能楽・落語・歌舞伎はもちろん，中国の南曲・唐伝奇・明清小説などの様々な文学ジャンルと芸術類型から題材を取り上げ，幽霊・物の怪・化け物・怪奇などに関する数多くの物語を記している。さらに怪異話以外，作者の神仏観・霊魂観を論じる内容も含まれている。これらの論述から，作者は漢学者として儒教の言説から受けた影響がみられる一方，教育者としての理性的な見方も示されている。

それでは，石川鴻斎は一体どのような鬼神観を持っているのか，作品はいかに彼の鬼神観を表現しているのか，また，「鬼神論」の裏にはどのような創作意図と背景が含まれているのか，これらの疑問を解明するために，小論は『夜窓鬼談』に見られる石川鴻齋の鬼神観を考察しようとする。

2　江戸期における知識人の鬼神観

「鬼神」とは，神や妖怪，幽霊や先祖の霊などの超自然的存在を総称する儒学の用語である[4]。数多くの儒者が鬼神の本質や存在，祭祀などの側面から，さまざまな見解を述べている。これらの儒家の議論や発言[5]が「鬼神論」と呼ばれている。以下は，新井白石・荻生徂徠・山片蟠桃・平田篤胤および曲亭馬琴の鬼神論を例として挙げている。

知識人	鬼神論
新井白石 （1657－1725）	朱子の世界観に基づき，「陰陽二気」という説を受け継いで事象を説明する。人間の魂と体は，それぞれ陰気と陽気で作られ，死後，天に昇る魂が神になり，地に落ちる魂が鬼になるとする。なお，鬼神は，祀る必要があり，祭祀をすれば，将軍家の繁栄を保つことができるという見方をする[6]。
荻生徂徠 （1666－1728）	鬼神の実在の問題についてはあまり踏み込まず，鬼神の祭祀を太古の聖人が人民を統一するために制定した一種の「制度」ととらえた[7]。
山片蟠桃 （1748－1821）	先人の鬼神論を批判し，唯物論的な立場から鬼神や妖怪，霊魂の存在を否定して「無鬼論」を主張している[8]。
平田篤胤 （1776－1843）	新井白石・荻生徂徠・伊藤仁斎など儒者の「鬼神論」を批判し，幽冥という死後の世界および鬼神の実在を証明しようとした。さらに直接に臨死体験をしたことのある人に聞き取りを行った[9]。
曲亭馬琴 （1791－1848）	陰陽二気の説を受けつぎつつも，祖霊祭祀に関わる内容はほとんど触れない。幽霊の実在を認める一方，時間が経つと，魂魄が散り切って残されないと主張している[10]。

[1] 名詞の並列を記す場合には「中点・」を使用する。
[2] (1812－1867)江戸時代後期の儒者。
[3] (1795－1873)江戸時代後期の儒者。
[4] 小松和彦，『妖怪学の基礎知識』角川学芸出版，2011，p.35。
[5] 子安宣邦，『鬼神論－儒家知識人のディスクール』福武書店，1992，p.8。
[6] 新井白石 著，松村明・尾藤正英・加藤周一 校注，「鬼神論」『新井白石・日本思想大系 35』岩波書店，1975，pp.146－181。
[7] 小松和彦，『妖怪学の基礎知識』角川学芸出版，2011，p.36。
[8] 小松和彦，『妖怪学の基礎知識』角川学芸出版，2011，p.36。
[9] 小松和彦，『妖怪学の基礎知識』角川学芸出版，2011，p.37。
[10] 曲亭馬琴 著，日本随筆大成編輯部 編，「鬼神論/鬼神余論」『日本随筆大成第 2 期 19・楓軒偶記/燕石雑志』吉川弘文館，1995，pp.339－358。

以上の諸説から，江戸時代の知識人らの陰陽二気論に対する継承と批判，および鬼神の存在に関する自身の思考が窺える。これらの言説に基づき，石川鴻齋は『夜窓鬼談』上巻の最後にも「鬼神論（上・下）」という二篇の作品を記し，一問一答の形式で鬼神に対する見解を述べている。

3　『夜窓鬼談』における「鬼神論」

『夜窓鬼談』の「鬼神論」は上編と下編に分けられ，上篇は主に人間と鬼神との関係を解釈したものであり，下篇は人間が鬼神に取るべき態度，および神仏の実在について論じたものである。それらの内容は以下のように要約できる。（下記の問題点は筆者がまとめたものである。また、本論で使用される『夜窓鬼談』（上/下巻）の原文は神戸市外国語大学図書館所蔵『夜窓鬼談』から引用したものである。）

「鬼神論」	問題点	回答
上篇	人間・鬼神とはどのようなものであろうか。	天地の間には，人間というものが存在している。農耕して（糧食を）食べ，布を織って服を着，建物を建て機械を作り，山を裂いて海を埋め，火と水を操り，鳥獣を使役する（などのことができる）。気を稟けて生まれるこの世の生物中に，人間より知能の高いものはいない。宇宙の間には，鬼神というものが存在している。幽冥の世界を司り，未来を予測し，隠微なことを洞察し，禍福をもたらす（などのことができる）。漠然として形のないものの世界中には，鬼神より霊性の強いものがいない[11]。
	鬼神と人間とはどのような関係があるのか。	思うに鬼神はまた人間であろう。聖人・君子・豪傑は死後，魂が消し去られることはなく，永遠にこの世とあの世に残されている。そして国を守護し子孫を憐れみ，勧善懲悪を諭し密かに善行と悪行に賞罰を与える。これはまさに鬼神というものである[12]。
	生きている聖人・君子・豪傑らが鬼神と通じることができるのか。	光明の現世に存在している形ある者が幽冥の世界に通じることはできない。（これと同様に）鬼神は（本来）形のないものであるため，人間の世界を左右することもできない。鬼神と人とは（本来）仲間であるが，司るものは異なる。それゆえ，聖人（孔子）が鬼神のことを語らないのだ[13]。 古代の人々は，草で編んだ服を着，木に登り果物を採集し，手で水を掬って飲み，智力が未だ発達していないので，悪巧みや悪賢い行いをしなかった。全て自然のままの純粋な素質であるため，天地鬼神に通じていた。我が国の神代の民がこれである。（ただし）人間の知恵がいよいよ開けるにつれて神の知恵が弱くなり，知恵が巧みなると生まれつきの素質が衰える。それで，神と人間の間に大きな隔たりが起き，二度と通じることができなくなり，人の世が形づくられた[14]。
	天地開闢以来，聖人・君子・豪傑らの数億の精魂が固まり合って宇宙を満たし，万年も消滅しな	凡そ人獣は天から魂を授かって生まれ，天に魂を返して亡くなる。生死の間はつかの間の形の変化に過ぎなく，精魂が消えることがないのであろう[15]。 ……子孫は先祖の跡を祀り霊魂に畏敬の念を示し，名を戴いてその徳を追慕するならば，先祖の魂もまた君臣父母夫婦兄弟のことを想わずにはいられない。そこで（子孫が）善行をすれば福をもたら

[11] 原文：天地之間，有人也者。耕而食，織而衣，造宮室，製器械，劈山填海，伸縮水火，使役禽獻，凡吸氣稟生者莫智於人矣。宇宙之間，有鬼神者。能主幽冥事，遠知將來，洞察隱微，以行禍福，凡漠然無形者莫靈於鬼神矣。（pp.99〔15 丁〕－100〔2 丁〕）

[12] 原文：蓋鬼神亦人也已矣。聖人君子豪傑之士，精魂不死，永留两間，守護國家，憫恤子孫，勸善懲惡，幽行賞罰，此之謂鬼神。（p.100〔2－3 丁〕）

[13] 原文：有形於明者，不能通於幽，鬼神本無形者，故不能為人事。鬼與人同道，而異其所主，故聖人不語鬼神也。（p.100〔3－4 丁〕）

[14] 原文：蓋上世之人，艸衣木處，採而茹，掬而飲，智識未開，偽詐不行，全純然天稟之智，是以不識不知，與天地神明相通，我神代之民是也。人智漸開，而神智漸衰，機智愈巧，而稟智愈滅，於是神人之間為一大關隔，不復得通，是為人世矣。（p.100〔4－7 丁〕）

[15] 原文：凡人畜，稟魂於天而生，還魂於天而死。生死之間暫藉形而已，魂神安得消滅哉！（p.100〔8－9 丁〕）

	いのか。	し，悪行をすれば災を下す。天に代わり賞罰を行い，少しの小さなことも見逃さない。（しかし）長い時間を過ごすと，子孫の追慕の感情がますます疎遠になる。そうすれば，神も天に戻っていく[16]。
	なぜ人間の知恵が鬼神に及ばないのか。	鬼（き）とは「帰（き）」であり，いわゆる真の居所に帰っていくという意味を指す。これからみると，死者が「真」に戻るならば，生きている人のことは「仮」であるだろう。すなわち，ものの形を借りて生きているのだ。この真と仮が存在しているゆえ，人間の知恵が神に及ばない。さらに「神」という漢字には示偏をつけ申と呼ぶ。「示」とは事によって人に見せるという意味で，「申」とはのべるということである。（だから「神」とは）いわゆる事情を述べて人に見せるという意味である。神は言葉を用いずに人に怪異や不吉な兆しを示す。それゆえ，聖人はもし迷いがあれば，占いで決断をするのだ。一方鳥獣の知恵が人間に及ばないと雖も，巧みと偽りがなく，天然の素質を持っているため，神は鳥獣に憑依して兆しを伝えるのだ。しかし，しばしば占いをするのは天の秘密を盗み見る行為である。（だから）この世に，陰陽道を操る人が鬼に嫉妬されるという説がある。これは神の司ることを盗んだゆえである[17]。
下篇	なぜ人間は鬼神を知ることができないのか。	目で見られないし，耳でも聞くことができないゆえである。この見えも聞こえもしないものを理屈で明らかにしようとすれば，その理屈も準拠すべきものではないだろう。（このような訳で）孔子は「其の徳為る，盛なるかな」や「陰陽測られず，これを神と謂ふ。」と言った[18]。
	動物の知恵は，もとより人間には及ばない。狩人に捕殺されたのに，なぜ死んでいるとその骨で占いをすることができるのか。	（果たしてこのようなことがあれば，動物や仙人が人間の世界から遠く離れているからだ。）人間から遠く離れているならば，神に近づいている。これは幽冥に通じるようになる理由であろう[19]。
	人間は鬼神に対してどのような態度をとればよいのか。	鬼神は陰で，人間は陽である。陰と陽と相接することはできない。（だから）陽である人が（陰である）鬼神のことを知ろうとするのは，熱いものの中から冷たいものを得ることや，燃えている炭の中から氷を求めることと同じだ。これは，全く理屈に通じないことである。…陽である人は鬼神のことを知らないのは天から賦与された規則である。もし強いて鬼神のことを知ろうとすれば，天の理に背くことになる。…（だから）陽である人間は幽冥の理を知らないのは自然である。この世の鬼神を語る人々は，皆茫然として知らない論説を説き，日々を費やし筆禿びて硯を磨き壊しても，何も得られない[20]。
	神仏や八百万の神などの神明は実際に存	これは，全て昔の典籍と書物に記載されているものだ。私は彼らの有無を知るわけがないだろう。古人が「天下のことはもとより実

[16] 原文：後之子孫，祭祀其跡，畏敬其靈，奉戴其名，追慕其德，神亦不得不眷戀君臣父母夫婦昆弟，故有善則福之，有惡則禍之，代天以行賞罰，毫釐之微，無復遺焉。歳月之遷漸久，景慕之情漸疎，神亦從而歸。（p.100〔10－12 丁〕）

[17] 原文：鬼，歸也，歸其真宅也。由是觀之，死者歸真，則生者假也，所以假形於造物者。人智之不及神智者，以有真假之別也。且夫神之為字也，曰示從申，以事示人曰示；申，伸也，所以伸示人也。神不言，以禎祥妖孽伸示人，故聖人有疑，決之卜筮。禽獸之智固非過於人，然無機巧，無偽詐，全純然天稟之智，是以鬼神憑依以告之。然屢窺之，屢竊天機也。世傳解陰陽者為鬼所嫉，竊神之所主也。（pp.100〔12 丁〕－101〔1 丁〕）

[18] 原文：目不能見焉，耳不能聞焉也。以其不能見聞焉者，欲以理明之，理亦無可準耳矣。孔子之聖，唯曰「其為德，盛矣乎！」又曰「陰陽不測之謂神。」（p.101〔4－6 丁〕）

[19] 原文：果如此則遠於人者，遠於人則不得不近於神，此其所以通於幽也歟。（p.101〔12 丁〕）

[20] 原文：夫鬼神陰也，人者陽也，陰與陽不得相接。今欲陽人而知幽神之理，猶熱中得冷，炭裏求冰，固理之所不能也。聖人業也知此理，故以遠於人者，探幽理，龜卜蓍筮是也。然陽人之不知幽神者，則天之所賦。欲強知神理，則亦戾於天理，若彼京房郭璞等，能解陰陽，終身不得官祿，而多罹災害，此以強探幽理，妄泄天機也。然則陽人者，不知幽神之理為常，世之說鬼者，皆渺茫荒惑，不可摸捉之論，徒費無益日支，禿筆穿硯，一無得焉已矣。（pp.101〔14 丁〕－102〔4 丁〕）

	在しているのだろうか。	在する必要がない。人がこれを信じると，これは真実になるのだ。物とは，ただの人心が凝縮された仮の姿だけだ」と言っただろう。こうしてみると，例え鮑君神や李君神ら（も同じだろう），人々が彼らを信じるならば，霊験が生じ，これは神像自体とは関係ないのだ。しかし，同じ形のものの間には，霊験あるものと霊験ないものが並存している。これは，人々の心が集まるか否かによって決まるのだ。そのものの有無とは全く関係ない。また，星は地球と同じような土の塊であるらしい。（占星術において人間がこれを）吉と思うと吉になり，不吉と思うと不吉になる。また星を織姫や彦星と呼ぶのも，全て人によって決められるのだ。（だから）災祥禍福も人間自身が招いてきたものであろう。星は地球との間に数百万里の距離があるのに，地球上の事情に影響を与えるわけではない[21]。

上篇の冒頭で，作者は人間と鬼神を分類し，両者とも各自が所属している「光」と「幽」の世界の支配者であると記している。そして，聖人・君子・豪傑の死後，魂が世間に残り人間に影響を与えるため，鬼神になるという観点から，鬼神は元々人間であるという結論を出した。この上で，聖人・君子・豪傑らが死後鬼神になれるならば，「彼らは生きている時に鬼神と通じることができるのか」という問題が提出された。

これに対して鴻齋は否定の態度を持ち，人間が形のあるものである一方，鬼神は形のないものであるゆえ，互いの世界に通じることができないと主張している。さらに，元々の人間は知恵がなかったため，天地鬼神との通じることができたが，人智が徐々に開けてくるにつれて，鬼神と通じることができなくなった，と人間が鬼神とは通じない理由を説明している。

鬼神の本質および人間との関係を解明した上で，作者は「鬼神が永遠に消滅しないのか」という疑問をめぐって分析している。これについて，彼は死と生とは形の変わりに過ぎないのであり，魂が消滅することがないのであろうと述べている。また，水と氷の例を挙げ，人が生まれるのは，水が塵に汚れながら凝結し，氷になるようなものであり，死んでいくのも氷が解けて水になり，さらさらと海に流れていくようなものだと論じ，生死の循環関係を示している。

しかし，鴻齋は次の段落において，子孫が先祖を祀ると，その精魂が鬼神になり世間に残され，若し後人が祭祀をしなければ，時間が経つとその精魂も消えてしまう，という鬼神の存在と祭祀との関係を解釈している。なお，この「精魂は時間が経つと消える」という観点は，『夜窓鬼談』上巻の第 18 編である「天狗説」の中でも言及されている。原文（和訳）は以下のようである。

> …天に上っていく霊魂は，自身の濃さと薄さによってそれぞれの融ける時間が異なる。この定説によると，百歳の狐（が死んでいると）精魂が千年生き続けることができなく，千年の亀の精魂も万年生き続けることができないだろう。これは蘭や麝香と同じように時間が経つとその香りも消えてしまうのだ。もし死者が鬼になり千年経っても消えないと，これは王充が言ったように「道には一歩にして鬼がおり，巷は鬼に満たされ空いている空間もない」ということになるだろう[22]。

以上の内容を比較すれば，「霊魂が消滅する」と「霊魂が消滅しない」という二つの矛盾点が現れる。ただし，「霊魂が消滅することがないのであろう」という文は，「霊魂が鬼神として永遠に残される」という意味ではなく，人間も霊魂も自然の一部に過ぎないため，消滅するか否か，全て自然の循環に含まれているのだという意味を表すのではないかと考えられる。作者は霊魂の存在を認める上で，霊魂と自然との関係の面に重点を置いて分析している。つまり，霊魂が自然から授かって最終的にも自然に戻っていくが，祭祀をすれば，天に戻る時間が延長され，霊魂が鬼神になり子孫を加護することになる一方，祭祀が行われないと，鬼神も徐々に消えてしまい，最後に自然に帰る，という見方を示している。

---

[21] 原文：是皆古典所載，余安知其有無哉！古人有言，天下事固不必實有其人，人靈之則既靈焉矣。人心所聚，物或托焉耳。由是觀之，若鮑君李君，人靈之，則自有靈驗矣，矧於神佛英雄塑像乎！然同體同形而有靈與不靈者，由於人心聚與不聚，固不關其人有無也。且聞星質本與地球同一土塊耳，為之祥則祥矣，為之孽則孽矣，為牛為女，皆人所名，而災祥禍福亦人所招，星與地相隔幾百萬里，豈關地上瑣事者哉！（p.102〔6－10 丁〕）

[22] 原文：夫氣之發揚者，從其厚薄，自有融化之時。以理推之，百歳之狐不能為千歳之鬼，千歳之龜不能為萬歳之靈，猶蘭麝芳馥，經旬日則失其氣爾。若死者盡為鬼，千古不滅，王充所謂道路之上一步一鬼，當填塞衢巷無空處。

そして，鴻齋は漢字の構成から，形声字である「神」の含意を解説し，意味を表す「示」の部首と音を表す「申」の偏傍に関する説明を通じ，鬼神が純粋な動物に憑依して人間に兆しを見せるゆえ，聖人は迷いがある際に占いをするのだという考えを表明している。しかし，作者は聖人の占いの合理性を説明している一方，陰陽道を操ることに対して批判の態度を表している。すなわち，人間が鬼神とは異なる世界を司るゆえ，強いて鬼神のことを知ろうとすれば，鬼神の秘密を盗むのであり，災いも招いてくると主張している。

上篇において，作者は鬼神と人間との関係，並びに霊魂の有無などの側面から人間と鬼神との相違点と共通点および霊魂の消滅に関する内容を分析している。これに基づき，下篇においては，「人間は鬼神に対してどのような態度を取ればよいのか」という問題を中心にして論じている。

鴻齋は，上編の最後に人間が鬼神を知ろうとすれば，逆に惑いが生じるという論点に引き続き，下編の冒頭で世間の鬼神を語る人を批判している。そして「なぜ人間が鬼神を知ることができないのか」という問題を説明し，鬼神は無形無声であるゆえだという理由を記している。実際には，『夜窓鬼談』下巻の序の中にも，これに関する記述がみえる。

> 韓愈は次のように言っている。「声と形のないものが存在している。鬼神がこれである。（ただし）声も形もない（ものであれば），聞こえないし，見られないのに，どうやって人間に禍福をもたらすことができるのか。人を生かすも殺すも，王侯しかできないが，鬼神はこれができる。国を治めるのは，英雄しかできないが，鬼神はこれができる。それゆえ，干害の際に降雨を鬼神に祈り，病む時も平癒を鬼神に祭る。福を祈り，寿命を祈り，婚姻のことを祈り，子孫のことも祈る。これは，まるで子供が両親に対し，民衆が君主に対するようであろう」と[23]。
>
> 彼はまたこのように言った。「鬼神は（憑依しているものの）形による姿を持ち，物に憑いてその声を出せる。それぞれに応じて災いをもたらすのは，実際には人がやっていることだ。獣に憑くと獣の力を持ち，鳥類に憑くと鳥類の鳴き声で鳴き，人に憑くと知恵と声とともに備わり，水火風雷に憑くと，様々な天変地異が生じ，測ることができない。（鬼神が）怒ると（人間に）禍をもたらし，喜ぶと福をもたらす。それゆえ，人間は鬼神を尊敬して祭祀を行う。だから（孔子が）『鬼神の徳たる，それ盛んなるかな。』と[24]。

『韓愈文集導読』[25]を調べると，以上の内容は韓愈の「原鬼」[26]から取られたものであると分かった。原文には，「形体があり声のないものは，土や石などがこれである。声があり形のないものは，風や雷がこれである。声と形体ともあるものは，人や獣の類がこれである。声も形もないものは，鬼神がこれである……人々が天理に逆らったり，自然天時に背いたり，約束事を破ったり，人倫に悖ることをしたりすると，精気に感応することがある。そこで，鬼が形を現し，声を出してこれに応じる。鬼が災いをもたらすのは，実際には人間自身が招いた結果である。」[27]と記している。

両者を比較すれば，『夜窓鬼談』下巻の序は単なる「原鬼」の引用ではなく，鴻齋が韓愈の見解を基にしてその中に自分の考えと解釈も加えているということが分かる。すなわち，韓愈の「鬼神は無形無声であるが，人間の行動によって変化が生じる」という見方を肯定した上で，鴻齋は人間と鬼神との関係を親子君臣と比喩し，さらにこれを切り口として，人々がなぜ鬼神を尊敬して祀るのかという問題の原因を分析し，鬼神が人間に禍と福をもたらすことができるという生活との深い繋がりのある理由を解明した。

以上の内容から，鴻齋は「原鬼」に記されている韓愈の鬼神思想を継承し，「鬼神の無形無声」

---

[23] 原文：韓退之曰：無聲與形者，物有之矣，鬼神是也。夫無聲無形，無聞無見，而其物何以與人為禍福也。生殺人，非王侯則不能也。而鬼能為之；治亂國，非英雄則不能也，而鬼能為之。是以旱則禱之，病則禱之，禱福，禱壽，蹈婚，禱嗣，猶兒之於父母也，民之於君也。（p.1〔3－7 丁〕）

[24] 原文：退之又曰：鬼有形於形，有憑於聲，以應之而下殃禍焉，皆民之為之也。然則憑獸則有獸力，憑禽則有禽聲，憑人則有聲與力，憑水火風雷，其變化不可測。怒則禍之，喜則福之，是以人崇敬之，祭祀之。故曰：「鬼神之為德，其盛矣乎！」（p.1〔7－9 丁〕）

[25] 銭伯城，『韓愈文集導読』巴蜀書社，1993。

[26] 銭伯城，『韓愈文集導読』巴蜀書社，1993，pp.86－87。

[27] 原文：有形而無聲者，物有之矣，土石是矣。有聲而無形者，物有之矣，風霆是也。有聲與形者，物有之矣，人獸是也。無聲與形者，物有之矣，鬼神是也……民有忤於天，有違於時，有爽於物，逆於倫，而感於氣，於是乎鬼有形於形，有憑於聲以應之，而下殃禍焉。皆民之為之也。

という特徴を自分の鬼神論の理論基礎としたことが明確に分かる。「鬼神論」下篇の論述は，主にこの論点を基礎として展開してきたのだといえる。

次は，鬼神の不可解を説明した上で，鴻齋が動物と仙人を例として，なぜ彼らは鬼神に通じることができるのかを分析している。

文章において，仙人や動物が人間から遠く離れているので，鬼神に近づいていると記していると同時に，鬼神は無形無声であるため，有形の動物と仙人が鬼神と少し通じるようになるが，その繋がりは深くない，という補充説明も書いている。そして，陽である人間が強いて陰である鬼神を知ろうとすれば，かえって禍をもたらし，世間の鬼神を説く人々も時間を費やすばかりで，少しも得をすることはないという考えを引出した。

さらに，次の段落で，鴻齋は人間が鬼神に取るべき態度をまとめ，鬼神のことを知らないと思っている人こそ鬼神のことを知っている人だ。特に君子が公明正大で道を行うならば，鬼神に媚びる必要もない，という観点を強調した。

また，下編の最後において，神仏の実在に関する疑問が述べされている。作者は古書に記されているものが真実か知らないと書いているが，神仏は伝説中のもので，星も地球と同じような土の塊であり，なお，神像には霊験が生じることや星が災いと福を招くことは，全て人間が想像してきたのだと論述している。つまり，鴻齋は人間死後の精魂の存在を肯定した一方，具体化された神仏や妖怪などの存在を否定した。

4　「鬼神論」の創作意図

それでは，石川鴻齋は何のために「鬼神論」を創作したのか。これは，作品集の全体から考察する必要があると思われる。そのため，次は『夜窓鬼談』の冒頭にある「鬼字解」と上・下巻二編の序から分析する。

4.1「鬼字解」

鴻齋は『夜窓鬼談』の作品を記す前に，凡例に加えて「鬼字解」の一文を設けている。題目の通りに，これは「鬼」というものの意味を解釈したものである。その原文[28]（和訳）は以下の通りである。

> 鬼と夜叉を混同しているのは昔から久しい。
>
> 『易経』の中には「鬼神と其の吉凶を合わす」と書かれており，『礼記』の中に「鬼神を以て徒と為す」と記されている。また，孔子が「其の鬼に非ずして之を祭る，諂（へいら）いなり。未だ人に事（つか）ふること能はず，いづくんぞよく鬼に事へん」と言った。（以上の典籍の中に）書かれた「鬼」は，孔子が言った「鬼神を敬する」という文に記されている「鬼」と同じものである。なお，列子が「精神形に離れ，各々其の真に帰り，故之を鬼と謂ふ。」と陳ず，王充もまた「人死すれば精神天に昇り，骸骨土に帰る，故之を鬼と謂ふ」と述べている。
>
> 昔は鬼と神が同じものだと考えられた。鬼のみで呼ばれている場合には，神の意味も含まれている。しかし，後世になると鬼と神が分けられ，陽の魂が神，陰の魄が鬼とされた。そのほか，気が伸びているものは神と呼ばれ，気が挫けているものは鬼と呼ばれるという説もあった。宋に至ると，儒者が鬼神のことは「二気の良能」あるいは「陰の霊と陽の霊」だと考えたこともある。
>
> 鬼神に関する説は古今東西異なる。しかし，死者のことを鬼と呼ぶのは同じである。例えば，左氏が書いた「新鬼」「故鬼」「若敖氏の鬼」など（の話にある鬼）はこのようなものだ。一方，恐ろしく凶暴あるいは勇猛な人のことも鬼と呼ばれる。例えば，高宗（武丁）が鬼方[29]という国を討伐した話の中に，「鬼方」の「鬼」とは異民族の意味であり，『山海経』にある「鬼国」という語彙も，遠夷のことを指す。我が国でも山賊のことを鬼と呼ぶ。例えば，古来の鈴鹿峠や丹後の大江山の鬼というものは，これに当てはまる。さらに草木，野菜や器物などを鬼と名付けたものも数多くある。
>
> また，宋の王欽若，丁謂などの五人の悪人は当時の人々に「五鬼」と呼ばれた。南宋の胡頴は淫祠を見ると壊したので「胡打鬼」と呼ばれる。（慶長・文禄の役に，）我が国の加藤清正が朝鮮を討伐した際にも，朝鮮人から「鬼上官」と呼ばれ，戦国時代の柴田勝家は「鬼柴田」，佐久間盛政は「鬼玄蕃」と呼ばれたこともある。
>
> ほかに，「地獄變相圖」中の閻魔の手下もまた鬼と呼ばれる。額には二つの角が生え，口から二つの

[28] 神戸市外国語大学図書館所蔵『夜窓鬼談』（pp.1〔10 丁〕-3〔1 丁〕）。

[29] 鬼方は中国殷時代の北西地方に存在した異民族の小国である。『易卦・爻辭』に「高宗鬼方を討伐す，3 年にしてことに克たむ」と記されている。

歯が突き出し，蛇の目，獅子の鼻，足も手も三本指，裸の皮膚は青赤で，虎の皮の褌を身につけているような姿である。唐の玄宗は鐘馗を夢で見た後，呉道子に命じて鐘馗の像を描かせ後世に伝えようとした。その鐘馗が捕まえた小鬼の姿も閻魔の手下と似ている。『翻訳名義集』によると，これは夜叉と言われ，勇健なものまたは暴悪なものと記されている。実際には今の（日本における）鬼というものは夜叉のことを指すのだ。ただし，夜叉を鬼としたのは必ずしも仏教から影響を受けていたのだとは言えない。また，王符は，かつて龍の角が鹿と似て龍の目が鬼（の目の）ようであると言った。『述異記』の中にも，小虞山には鬼女がおり，一度に十人の鬼子を産み，朝産んで夕方になると鬼子を全部喰ってしまうと書かれている。ここの「鬼」は鬼方，鬼国の鬼と同じであろう。

なお，鬼は人の死後の名前でもある。祭祀をすれば死者が神になり，祭祀をしなければ死者が鬼となる。さらに，釈迦も死んでいると仏となるのだ。これからみると，仏も鬼（の一種類）であろう。（もちろん，ここの）「鬼」を鬼方，鬼国の鬼で解釈することはいけない。

この世には，嫉妬深い女が鬼になり，額に角が生え，口が耳まで裂けるという説が流れている。これは，謡曲の『道成寺』,『葵上』などの中に描かれている鬼女のことである。（しかし,）私からみると，このような女性が地獄に落ちれば，火の車に乗せられることや，鍋で煮られることなどにはならず，逆に閻魔の手下になり罪人に罰を与えるのだ。さらに，極悪人が死の前に鬼の姿になり必ず地獄に落ちるという説もある。（この説によれば，彼らが）地獄に落ちると，車を引き戈を操り，焜炉に火を入れ臼を磨く（などのことが命じさせられる。）これは（彼らが犯した罪と）普通の罪人（の罪）と比べることができない故だ。（これらの伝説が流れているせいで，世の人々が）鬼と夜叉を混同しているのだ。

私は（以上のように鬼と地獄のことを）説明したが，まだ鬼と夜叉を明確に分けていない。これはなぜだろうか。

東方朔の『神異經』中に，鬼を飯として食う者がおり，最近の樂蓮裳の『耳食録』中にも，鬼を売る者がいる。これらの鬼は，鐘馗に捕まえられた鬼の類ではなく，地獄の獄吏のようなものでもない。前者は宇宙に飛んで行く死者の霊魂を食うのであり，後者は鳥獣に憑いている魂を捕まえるのだ。（つまり,）古人が鬼の字を用いる場合は多く，その意味が決まっていないからだ。私は怪談を書こうとするので，まずは「鬼」という字を解釈して人々に教えよう。

文章の構成からみると,「鬼字解」は中国古典における鬼神についての記載，日中文化における鬼のイメージ，並びに「鬼字解」を書く目的，という三つの部分に分けられる。

まずは，文章の冒頭に「鬼が夜叉とは混じり合う」という中心問題が指摘されている。そして,『易経』・『礼記』・『論語』などの典籍における鬼神に関する記載を例としてあげ，鬼神のイメージの多様性を示している。その上で，多様性が生じる原因の分析を通じ，人々が本来鬼と神を同じものだと思ったが，時代の発展に従いそれらに対する見方も変わっていったという観点を表している。

その後，鴻齋が「鬼」という漢字についての種々の解釈を記している。この一段落の内容を次のように分類してまとめる。

（1）死者，霊魂。特に中国の典籍により，祭祀が行われる場合は神となり，祭祀が行われない場合は鬼となり，いわば寄る辺ない魂になる。

（2）陰陽の気。陰の気は鬼で，陽の気は神である。

（3）恐ろしい異民族。

（4）山賊や盗賊の悪人，凶悪な人間。

（5）草木野蔬器物の命名に用いられたもの。

（6）勇猛果敢な武将。

（7）地獄の鬼卒（夜叉）。

作者は，中国伝統の鬼神観から鬼（陰の精魂）と神（陽の精魂）の関係を説明した上で，大量の例を挙げ，日中歴史上や文化，俗信における鬼のイメージを述べている。また，文章最後の一段落で，鴻齋は自問自答で，昔の人間が「鬼」という漢字を使用するのは絶対ではなく，鬼談を書くために，まず「鬼」のことを読者に紹介してあげたい，という一文で締めくくり，結びとした。この一句から,「鬼字解」の創作目的が分かる。すなわち「鬼」に関する定義を日本の伝統的な「夜叉」という形象と区別し,「鬼とは死者・霊魂・天地の気」という儒教の霊魂観を説明し，読者が作品を読解する際に惑いと誤解をしないようために書いたのである。

4.2『夜窓鬼談』の二編の序

『夜窓鬼談』は上巻と下巻いずれも冒頭に序がある（上巻の序を序 1 と記し，下巻の序を序 2 と記す）。序 1 においては，人々が怪異を好む理由や怪談の教育性，および本書執筆の目的などに

関する内容を記している。序 2 は「鬼神とはどのような存在であろうか」という問題を中心として論じたものである。二編の間には関連性があるため，文章をまとめて分析する。それらの原文（略訳）は以下のようである。

序 1

蘇軾は嶺表にいた頃に，身分に関わらず様々な人々と交わり遊んだ。諸君と勝手気ままに冗談を交わす。その中に，話下手な者がおり，あえて化け物の話をした。蘇軾のような賢明な人でも化け物の話を好む。彼は怪談を信じているので好きなのか，それとも芝居を見ることと同じように，話を楽しむだけなのか。顔真卿，李泌，韓愈などの文人らも怪談が好きなのだ。また自分も人形師のように怪談を作り，人々にこれを語って驚かせたり喜ばせたりする。元来，怪談を語る人は昔から多くいた。孔子のみは例外であったが，『左伝』の中に怪奇と怪異のことがよく記されている。後世の史書編纂者らも常に怪異話をして人から疑惑を招いた。また，稗史，小説なども怪異に触れないものは殆どない。これは人々が怪談を好む故であろう。

怪奇談は凡そ伝聞によるものである。その話の出所を探すと，皆ようとして誰も分からない。だが，一匹の犬が吠えると，多くの犬も吠えるのと同じように，人々が噂を伝えるうちに，蚯蚓が蛇になって蛇が龍になり，噂が噂を呼び後世に伝えられ，記録されることになった。なので，この世には怪談が多く伝播されているのだ。蒲松齢が『聊斎志異』を作る時，弟子らは各地から怪談を集めた。袁枚が『新齋諧』を編纂した時に，友人らが競って怪聞を告げ，彼はその上で文飾を施して面白い物語を作ってきた。たまに，その中に不合理なところがあっても，作者は自ら弁解もせず，当然読者も追究はしない。遊戯の作品は，もとより風を描き影を刻むものであるゆえ，真剣で論じることはできない。ただし，若干，勧善懲悪の要素も含めており，世の中に教訓を与えることはできる。（確かに，）賞賛されるところもあるが，『水滸伝』や『西遊記』と同じものとは言えない。

私は，壮年の頃諸国を漫遊し，奇怪や不思議なことを聞く時，必ずそれらを記録して保存し，少しの教訓性があるものなら捨て切れない。教育することには方法があり，学生の興味があることから教えると，有効で即効性がある。逆に興味がないことからすれば，教師の力が無駄になる。この小説は，人々の好むことを取り上げて作ってきたのである。読者を正しい道に導くために，中には諧謔の内容も加え，読者を飽きさせないようにする。原稿が完成後，東陽堂の主人がこれを刻み，画師に挿絵を描かせ，石版で印刷した。精緻で誤りも殆どなく，画学にも役立てることができるだろう。ああ，私は人に話をさせ，自分も話を潤色して書いた。これは，聖の門には入れないが，せめて蘇軾の仲間になれるだろう[30]。

序 2

周の文王が卦を作り，周公は不思議な言葉を用いて綴った。孔子が鬼神のことを言わぬ一方，左氏は怪異話を語ることが好きであった。それから戦国・秦・漢の書物も怪奇に触れないものは殆どない。老荘や仏教の徒は詭弁していたが，これは義と理を解明する人がいないゆえであろう。

韓愈は次のように言っている。「声と形のないものが存在している。鬼神がこれである。（ただし）声も形もない（ものであれば），聞こえないし，見られないのに，どうやって人間に禍福をもたらすことができるのか。人を生かすも殺すも，王侯しかできないが，鬼神はこれができる。国を治めるのは，英雄しかできないが，鬼神はこれができる。それゆえ，干害の際に降雨を鬼神に祈り，病む時も平癒を鬼神に祭る。福を祈り，寿命を祈り，婚姻のことを祈り，子孫のことも祈る。これは，まるで子供が両親に対し，民衆が君主に対するようであろう」と。

彼はまたこのように言った。「鬼神は（憑依しているものの）形による姿を持ち，物に憑いてその声を出せる。それぞれに応じて災いをもたらすのは，実際には人がやっていることだ。獣に憑くと獣の力を持ち，鳥類に憑くと鳥類の鳴き声で鳴き，人に憑くと知恵と声とともに備わり，水火風雷に憑くと，

[30] 原文：東坡在嶺表，所與遊者，各隨其人高下，談諧放蕩，不復為診畦，有不能談者，則強之說鬼。於乎！坡公之賢，尚喜說鬼，子知信其事而喜之耶？抑亦如觀演劇衒衒，使人為之自娛者耶？顏魯公、李鄴侯、韓昌黎諸子，皆好談神怪，亦自為偃師，弄幻翫假，使人悲喜驚怪者耶？蓋說怪亂，古亦不少，獨孔子不語焉。左氏傳經，屢載神怪。後之修史者，莫不說神述怪，使人疑且惑。而如鄙史小說，莫不涉一神怪。顧緣人情所好而然乎！凡說奇談怪者，多係傳聞，叩其遭遇者，或渺茫荒惑，無可准者矣。而眾犬應聲，以蚓為蛇，以蛇為龍；三人成虎，遂至特書，傳於後世，此所以世間多奇談怪說也。蒲留仙書《志異》，其徒聞之，四方寄奇談；袁隨園編《新齊諧》，知己朋友，爭貽怪聞，於是修其文，飾其語，至絢爛偉麗，可喜可愛，而有計算相違，事理不合者，不復自辯解焉，讀者亦不咎焉。遊戲之筆，固為描風鏤影，不可以正理論也。然亦自有勸懲誠意，聊足以警戒世，是以為識者所賞，不可與《水滸》、《西遊》同日而語也。余壯年環遊四方，每聞一奇事，一怪談，必書以貯之。間有關世教者，非複可棄也。夫教誨人，自有方，從其所好導之，其感亦自速。若以所不好誘之，徒費辭而終無益爾。余修斯編，欲投其所好，循循然導之正路，且雜以詼諧，欲使讀者不倦，且為童蒙綴字之一助了。稿成，東陽堂主人刻之，又使都門畫工圖之，以上石版，濃淡緻密，不誤毫釐，亦足以為畫學之一助。嗚呼！余也使人說，又自潤色談之，雖不能入聖門，而不見斥坡公之坐者乎！

様々な天変地異が生じ，測ることができない。（鬼神が）怒ると（人間に）禍をもたらし，喜ぶと福をもたらす。それゆえ，人間は鬼神を尊敬して祭祀を行う。だから（孔子が）『鬼神の徳たる，それ盛んなるかな。』と。

世の中で怪異を語る人は百人百様なので，話の内容が異なる。そのため，（怪談における）鬼のイメージも多様であり，新しい物語が作られ，面白い話が演じられる。そうなれば往々にして想定外のものが生じる。（これは）人間の知恵が進むにつれて鬼神の知恵も進んでいく（故である）。人間が精密な機械を作れば，鬼も自由に変化できるようになる。（例えば）柳の陰や墓の傍，枯れた井戸や暗闇の燈篭という場所に出没することだけでなく，さらに自分の住みかとするところも作るようになる。ああ，世の文人らが一生懸命で著述を書いても鬼談が尽きない。昔，蒼頡が文字を作った時，鬼が夜に泣いたという。これは，文書によって自分の罪が追及されることを恐れたからだ。もし鬼の行為が正しければ，追及されることを恐れる必要もないだろう。筆者もまた勧善懲悪をしたいのだが，なぜ孔子の戒めに背くのか。これも世の教訓と関係があるのだろう[31]。

序 1 において，まずは蘇軾，顔真卿，李泌，韓愈などの文人を例として怪談を語る情況を記している。この上で，中国の典籍と聖人の例を挙げ，人々が怪談を好むという現象の歴史性と普遍性を示している。そして，怪談の伝播について述べている。すなわち，怪異話は流言と同じように人々の口から口に伝わり，その過程に従いプロットにも様々な変化が起こる。斯くして，怪談の伝播性と多様性が互いに影響し合い，怪異話の内容を豊かにすると同時に流布の範囲も広がっていく。この分析に基づいて，鴻齋は蒲松齢と袁枚を例とし，彼らが怪談集を作った際に，弟子親友らに任せて各地から怪談の情報を集めるという事実を書いている。これらの記述から，怪談は単なる戯作であるが，勧善懲悪を含めていることが指摘された。また，文人が怪談作品の創作に参与したことから，怪談の文学性と物語性が高まっていったと石川鴻齋が認識していることが分かる。序 1 の最後に，鴻齋は自分の遊歴によって創作の資料と情報を集めることを記している。なお，『夜窓鬼談』の創作動機も明らかにした。すなわち，人々が怪談を好むため，怪談という受け入れやすい形式で，教訓および漢文の教育を人々に与えようとするのだ。

序 2 の冒頭には，再び中国の典籍と聖人の例を挙げ，怪談を語ることの普遍性と歴史性を強調した。そして，韓愈の鬼神論を引用し，鬼神は無形無声であるが，人間の行動によって福と災を齎すという見方を論じる。この上で，人々の言い伝えによって物語が様々となるゆえ，この世に種々な怪談が残されていると書かれている。人間の想像力に基づいて鬼神に関する異なるイメージが生じ，人間の知恵が進むにつれて鬼神に関する話の物語性も高くなり，鬼神は完全に人間が作ってきたものだという結論が出されている。これは，怪談の多様性と娯楽性を強調したのだ。つまり，俗信崇拝より怪談作品自身の物語性を重視するべきだということであると考えられる。

以上の分析からみると，鴻齋は怪談の流行と民衆に好まれる理由を述べており，この問題の歴史源流と現状，および発生法則を明らかにし，『夜窓鬼談』の最初と最後いずれにも鬼神の本質や形象，人間との関係などに関する論述を設けていることが分かる。これは偶然ではないと考えられる。すなわち，読者が怪談を読む前に，鬼神と妖怪とはどのようなものであろうかという問題について明確に認識させるために，作者は『夜窓鬼談』の最初に序と「鬼字解」を設けているのだといえる。さらに，最後に設けている「鬼神論」はこの意図を再度強調している。特に「鬼字解」，二編の序および「鬼神論」は三編とも怪異や妖怪が人間の想像であるという内容が記されていることから，作者の創作動機が明らかに窺える。すなわち，①人々が怪談を好むため，鴻齋が怪談という形式で人々に教訓を与えようとする。②宗教崇拝より，怪談の多様性と娯楽性を強調しようとする。③鬼神は人間の死後の霊魂として認められたが，具体化された神仏と妖怪の存在

[31] 原文：文王作象，周公繫以怪辭；孔子戒亂神，左氏喜說鬼事。下至戰國秦漢之書，莫不盡涉奇事怪談。於是，老、佛之徒，益恣詭辯，蓋以無窮理明義者也。韓退之曰：無聲與形者，物有之矣，鬼神是也。夫無聲無形，無聞無見，而其物何以與人為禍福也。生殺人，非王侯則不能也。而鬼能為之；治亂國，非英雄則不能也，而鬼能為之。是以旱則禱之，病則禱之，禱福、禱壽、蹈婚、禱嗣，猶兒之於父母也，民之於君也。退之又曰：鬼有形於形，有憑於聲，以應之而下殃禍焉，皆民之為之也。然則憑獸則有獸力，憑禽則有禽聲，憑人則有聲與力，憑水火風雷，其變化不可測。怒則禍之，喜則福之，是以人崇敬之，祭祀之。故曰：“鬼神之為德，其盛矣乎！”世之説鬼者，百人百種，不同其事。顧鬼亦去舊套，創新意，棄陳腐，演妙案，於是往往有出於意表者。蓋人智日進，鬼智亦進；人能精機巧，鬼亦恣變化。不以彼柳蔭墓側，眢井籠燈，而已為巢窟也。嗚呼！操觚之士，禿筆穿研，更僕不可盡者鬼談也。昔者蒼頡作字，鬼夜哭，恐文書所劾也。鬼正其行，何恐見劾，記者亦主勸懲，何乖孔聖之誡怪亂，豈謂不關世教乎哉！（pp.1－2）

を否定するという鬼神観を表現しようとする。

5　終わりに

石川鴻齋は怪談作品を創作すると同時に，自分の鬼神観も論じている。これらの神仏観・霊魂観を表した「鬼神論」という上・下二編の文章において，鬼神の本質や，人間との関係，相違などについての内容を述べており，さらに，鬼神と人間の間にある越えられない壁，および壁の存在する理由も記している。

作者は儒教の「鬼神とは二気である」という鬼神観を受け継ぎ，人間死後の精魂の存在を認め，陽の精魂を「神」，陰の精魂を「鬼」とし，人間と鬼神は互いに影響を与えるが，一線を越えないという鬼神の不可知論を持っている。さらに，具体化された神仏や妖怪の実在を否定し，鬼神を盲目的に信じてはいけないのだという観点も示している。

また，上巻と下巻の二編の序，「鬼字解」および「鬼神論」の内容を分析すると，これらの三編が呼応していることが明らかになり，これを通じて作者の教訓と漢学啓蒙の意図も窺える。

一次文献：
石川鴻斎 著，吾妻健三郎 編，『夜窓鬼談』東陽堂，1889。
銭伯城，『韓愈文集導読』巴蜀書社，1993。
王三慶ほか編纂，『日本漢文小説叢刊・第一輯第 2 冊』台湾学生書局，2003。

参考文献：
新井白石 著，松村明･尾藤正英･加藤周一 校注，『日本思想大系 35』岩波書店，1975。
石川鴻齋 著，小倉斉・高柴慎治 訳註，『夜窓鬼談』春風社，2003。
曲亭馬琴 著，日本随筆大成編輯部 編，「鬼神論/鬼神余論」『日本随筆大成第 2 期 19・楓軒偶記/燕石雑志』吉川弘文館，1995。
国文学研究資料館 編，『明治開化期と文学－幕末・明治期の国文学』臨川書店，1998。
小松和彦，『妖怪学の基礎知識』角川学芸出版，2011。
子安宣邦，『鬼神論－儒家知識人のディスクール』福武書店，1992。
近藤喜博，『日本の鬼：日本文化探求の視角』桜楓社，1975。
斎藤希史，『漢文脈の近代』財団法人名古屋大学出版会，2005。
文化庁 編，『明治初期の言語・文字の教育』風光出版，1962。
村山吉廣，『漢学者はいかに生きたか：近代日本と漢学』大修館書店，1999。
ロバート・キャンベル，「在野十年代の視程－儒者・石川鴻齋年譜稿抄」『明治開化期と文学』臨川書店，1998，pp.189－211。
鷲尾順敬 編，『日本思想闘諍史料・第 5 巻』名著刊行会，1969。